

イーハトーボの劇列車



イーハトーボの劇列車^{げきれつしゃ}

昭和五十五年十二月二十日 印刷
昭和五十五年十二月二十五日 発行

著者 井上ひさし

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務(三六)五一二 振替東京四一八〇八
編集(三六)五四二

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

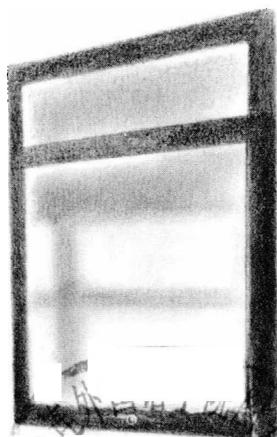
定価八八〇円

©Hisashi Inoue, Printed in Japan, 1980.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

上ひさし

ハトロボの劇列車



新潮社版

イーハトーボの劇列車

登場人物

宮沢賢治

宮沢政次郎（父）

宮沢イチ（母）

宮沢とし子（妹）

福地第一郎（三菱社員）

福地ケイ子（第一郎の妹）

西根山の山男

なめとこ山の熊撃ち淵沢三十郎

人買いの神野仁吉（曲馬団団長）

人買いに売られた娘

風の又三郎らしき少年

背の高い、赤い帽子の車掌

稲垣未亡人

伊藤儀一郎

女車掌ネリ

1 農民たちによる注文の多い序景

〔笠に蓑に草鞋〕〔継布^{つぎ}だらけの、剣道稽古衣のような野良着、色のあせた紺股引、冷飯草履〕〔つんつるてんの古背広上下にゴム長靴〕〔洗い晒しの襟なし木綿シャツ、黄色い作業ズボン、地下足袋〕〔ボロシャツにジーンズ、踵を潰したスニーカー〕……思い思いの出立ち^{いでえ}、身なりの農民たちが、それぞれの装いに釣り合った旅荷物を持って、きれいな青空の下、すきとおった風のなかに立っている。

やがて農民たちは次の序詞を、「新劇風シユブレッツヒコール」からはもつとも遠い語り口や物言い、声を揃えて、あるいはてんでんばらばらに語る。ひよつとしたら彼等は歌うかもしれない。

わたくしたちはホテルのりっぱな料理店へ行かないでも、きれいにすきとおった風をたべることが出来ます。コココーラの自動販売機などなくとも、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしたちは、たんぼやはたけや森の中で、仲間のひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろーどや羅紗やカシミヤやイッセイミヤケやハナエモリのきものにかわっているのをたびたび見ました。

わたくしたちは、そういうきれいなたべものやきものがすきでした。……でした。

これからのわたくしたちのおはなしは、みんな林や野原や鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。それから筑摩書房発行の宮沢賢治全集全十四巻のなかからもらってきたのです。ほんとにかしわばやしの青い夕方をひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかにふるえながら立ったり、農協の図書室の石油ストーブのそばで宮沢賢治全集の頁をめくったりしていますと、もうどうしてもそんな気がしてしかたがないのです。ほんとにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたがないということを、村から、この世から旅立つ最後の仕事として、こうして劇に仕組んだまでです。

ですから、これからのおはなしのなかには、お客様のためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしたちには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたく

したちにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしたちは、これからのおはなしのところどころが、お客様のために、すきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

そしてわたくしたちのためには、これからのおはなしはみんな、長い旅のあいだのビスケットになるでしょう。

空はりんごのいい匂いでいっぱいです。これはいま、西の空に沈んだばかりの赤いお日様が吐いた匂いなのです。

語り終えて農民たちは、冴え冴えしていて何か笑っているようにさえみえる。なお、賢治の作品においては、死んですぐの者は常に「冴え冴えして何か笑って」(たとえば『なめとこ山の熊』『よだかの星』) いることになっている。

2 大正七（一九一八）年十二月二十六日夜の上

野行きより急行二〇二列車は dah-dah-dah-

dah-dah-sko-dah-dah……

冴え冴えと笑っていた農民たちが突然、声を合わせて「^ヤdai」と叫ぶ。だれかひとりが「シュー」と蒸気を吹き出す音をたてる。つまり「^ヤdai」＋「シュー」で停車中の蒸気機関車をあらわす。

この一回目の「dah」＋「シュー」をきっかけに農民たちは、雀に飛び込まれ網を破られて驚愕した蜘蛛の子のように、上手や下手へ散る。

一瞬のあいだ舞台は空っぽ。照明は十二月下旬の、雪もよいの、青い夜。信号燈^{シグナル}の赤い光が一条。

すぐ、行商人、下級官吏、人買いに連れられた娘、東京から鳥打ちにきて引きあげる若い紳士、兵隊、この地方を調べにきた民俗学の先生、鉾山技師などが、それぞれ自分の分の三等客車の一部分を持って登場し、席を占める。するとどうやら三等客車が出来る。なお、三等客車といつても、片側の座席だけだ。通路のこちら側の座席は観客席という見立てである。客車内の場面はこれからもしばしば出てくるし、というよりこの劇は、半分以上が客車内で終始するはずだが、常に上手が上野、下手が青森である。

乗客たちはそれぞれ（入念に計算された）勝手な動きで三等客車を組み合せて行くが、その間にも二回ばかり一斉に「dun」と叫び、その都度だれかが「シュー」と蒸気を吐く。赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が下手からあらわれて、

車掌

花巻はなまきイ、花巻イ。花巻さ御用のある方は勿論もちろん、降りてください。岩手輕便鐵道土沢、宮守、遠野方面さおいでの方、また、花巻電鉄一本杉、二ツ堰ふたまた方面さおいでの方も降りて、お乗り換えください。花巻イ、花巻イ。この列車は大正七年十二月二十六日の青森始発上野行上り急行二〇二列車です。当花巻駅からの発車時刻は午後八時二十六分であります。花巻イ……

と上手へ触れ歩いて行くが、車掌は大道具にも関心があるらしく、三等客車の出来具合や、道具の合せ目などの点検もする。

車掌と入れかわりに、下手から宮沢賢治（二一・盛岡高等農林学校研究生。いまでいえば助手）と、母イチ（四一）が乗り込んでくる。ちょうど窓際に向い合っていた人買い（下手側）と買われた娘（上手側）の隣りの席が空いている。そこで賢治とイチは通路側の席に向い合って坐ることになるが、賢治は荷物を棚へのせながら、

賢治 あ、母ちゃんは上野の方さ、汽車の行く方さ背中ば向けた方が良いべなす。

イチ なしてだべか？

賢治 おら、東京さ出張^でって行く^えのは、これで三度目だはんて旅馴^はれして居^えっから言う^やんだども、汽車が脱線だの転覆だのしたとすつと、背凭れさ背中ばくつ^えつ^えつ^えで居^える方が安全なんだこつたよ。

賢治は上手側の席に母イチを坐らせ、自分は下手側の席に腰をおろす。この間にも時折、全員による「dai」とだれかの「シューッ」。

イチ 縁起でもねえごどは言わねもんだよ、賢さ。とし子は東京の日本女子大学校で急病さかかって熱発して入院する。その上、とし子の看病さかけつけるおら達の乗った汽車までが脱線だの、転覆だのする……。宮沢の家はとんでもねえ年の暮ば迎える事さなってしまうごつたよ。

賢治 急停車するづうど慣性の法則つうものが働ぐわけだ。するづうど、おら、前の方さぶつ飛んで頭ア碎げる。馬車さ轢かれた蛙の様にびちゃつと潰れでしまう。したれども母ちゃは背凭れのおかげでぐつと踏みとどまるごどが出来る。ぶつ飛ばなくてもすむ。なす？

氣にして聞いていた人買いが娘と席を入れかわって上手側に坐る。そのときちらりと真田紐が見える。娘の帯に蛇のような真田紐。その端を人買いが握っているのがある。

イチ だども賢さが前の方さ、おらの方さぶつかって来るのであれば、同じごどだべなす。

賢治 そごは母ちゃ、さつとうまぐ避けるわけす。

イチ 忍術使いでもあんまいし、そつたなごど……

賢治 だば、おれ、その時は左の方さ反れでぶつ飛ぶごどにする。此様なふう……（とやって

みせて)……なす?

イチ はいはい。なんたらまんつ母親孝行な倅だごだ。大船さ乗ったつもりで行くごにするべが。なはん?

賢治 ン。白河夜船と寝てごさい。

左の方とは、人買いの席である。人買いはいやな顔をして、またもや娘と入れかわる。

そのとき賢治たちの座席の車窓をプラットホームからコンコンと叩く男がある。人買いは知らんぷりをして、四合燗を舐めている。娘が立つて窓を押し上げようとす。が、人買いは余計なことをするなど、強く真田紐を引く。賢治が気付き、立つて窓を明ける。男は賢治の父・政次郎(四四・このときすでに花巻町会議員。鉄縁の丸眼鏡。インパネス)。

賢治 やあ……、とし子と母ちゃのごどは、おらさ任せてください。

政次郎 毎日、とし子の様子ば手紙で知らせねば駄目だぞ。手を尽して看病してくるのだぞ。病院の費用はなんぼでも送ってやる。したども汝が使つては駄目だぞ。とし子が治つたら直ぐ帰って来い。浅草オベラなん言うものさ夢中さなつて浮がれて居では駄目だぞ。

時々、ほとんど聞えないぐらいに低くなってもよい。よろしき折をみて注意汽笛を数回。上手からあらわれて下手へ流れさる信号燈が二十数本。

さて汽車が動きはじめて間もなくのこと、下手から奇ッ怪な大男が三等客車へ入ってきて空座席を探していたが、どこにも空がないので賢治たちの座席の通路に直接に坐る。黄金色に光る目玉、赤い顔、茶色のばさばさの髪。古い白縞の単衣の上に綿入れ。綿入れの背には大きな桔梗の紋。鼠色の、袋のような袴をどふっとはいいて、首から大型の、青い縞の財布を下げてゐる。男は正座して書物を開く。が急に不安そうな表情になって周囲を見回す。上から書物を覗き込んでいた賢治とばったり目が合う。なお、やがて明らかになるが、この男は西根山の山男である。

山男　ちよつとお訊ぎ申しあんす。これはたしかに東京さ行く汽車でござーますな。

賢治　（頷いて）それも急行です。

山男　はで、急行つうど？

賢治　駅ば端折るわけです。飛ばすわけです。どんどん抜がすわけです。

山男　上野駅も抜がすんだべが。

賢治　上野駅は抜がすわけに行きません、終点だから。

山男　（大いに安心して）はっはっはっ（途中で口を押えて笑う）はっは……。終点とは、まっ

たく世の中さは便利調法なものがあゝるもんでござゝますな。さて、氣取つたごどばお訊ぎするようござゝますが、上野づ処さは、精養軒づ料理店がござゝますか。

賢治 上野のお山にあるつす。盛岡高等農林の修学旅行の時、みんなでオムレジ喰ひました。極上等のパンだのバタだのも。扇風機はふうふうて回り、白いテーブル掛けは波立てて、テールの上さは緑だの黒だのの植木の鉢が立派に並び、どこもかしこもいい匂いがぶんぶんて、夢見でる様な料理店だったもんだつたつけ。……あのう、上野駅から五分とかかりません。

山男 ご教示ありがとうございます。

賢治 んで、精養軒で何があんのだべが。親族会議だとか、それがら……
イチ 賢さ、そげな立ち入つたごど訊いでは、不調法づもんだべ。

山男 いやいや、よくぞ尋ねておごやつた。おらは如何にもけちなものではありまするが、学会の招待状づものば貰ひまして。はつはつは……

山男 は手にしてゐた書物をいかにも大事そうに賢治へ渡す。

山男 その中さ招待状づものがはさまつて居つと思ふす。

賢治 (題名を読む)『便利調法・知つて置くべき日常の作法』。どうもあんまり行儀が良いなど思たれば、やつぱり道理でなはん。